
猫は嫌いですか？

愚者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫は嫌いですか？

【コード】

N0260E

【作者名】

愚者

【あらすじ】

ある初夏の日。買い物帰りの俺は見上げる少女は・・・！？

#1「落ちてるものを拾っては・・・にも、例外はある」(前書き)

趣味100%の作品です。

#1「落ちてるものを拾っては・・・にも、例外はある」

「うにゃうにゃー」俺の部屋で猫のような声が聞こえる・・・

#1「落ちてるものを拾ってわ・・・にも、例外はある」

6月21日 雨 近所の公園で、俺はそいつに出会った。

今日は仕事も休みで、俺は近くのスーパーに買い物をした帰りで、左手に袋、右手に傘の状態だった。

「みいーみいー」目の前にあるそこからは、猫のような可愛い声が聞こえる。

俺は呆然と立ち尽くしていた。

目の前にあるダンボールの中には・・・

「お前は、猫なのか？」漫画にしかいなさそうな3、4歳くらいの大きさの猫耳が生えた女の子がいて、雨と悲しみに濡れた目で俺に向かって鳴いていた。

俺は一戸建てに一人暮らし。親は「あんたを早くに身ごもって、新婚旅行に行けなかった」のを理由に、世界中を旅している。

いつも通り広々した俺の家に、

「みいー」と、猫の音が響く。勿論、先ほど公園で、鳴いていた猫だ。俺は買い物をもってから、猫を少し暖かめのお湯を張った洗面器に入れ、洗った。

猫は大抵水が苦手なはずだが、こいつは気持ちよさそうに目を細めている。

「お前は変わり者だな」頭をお湯で洗いながらいうと

「にゃー」と、一鳴き。人の言葉が分かるのかもな・・・

裸に布が巻かれただけの状態だったから、結構冷えていた。

今はタオルを巻きつかせている。いろいろと隠すためだ。

チラッと確認したことだが、身長と猫耳、尻尾以外は普通の人間の

体をしていた。女の子だ。

「お前はどこから来たんだ？」仕方なく、タオルを外して、体を洗いながらきく。

「うにゃ？」つぶらな瞳が俺を見上げる。やっぱり人語の理解は不可能みたいだな。

「はぁー……取り合えず、こんなもんか」洗い終わった体に、清潔なタオルを巻きつける。

「服……こんなサイズのあったか？」髪にドライヤーをかけて乾かしながら考える。

「押入れ……屋根裏の洋服ボックス……」候補はいくつかあった。

「取り合えず、お前はここで待機な」タオルを巻いて動けないようにしてから、俺のベッドに放り出す。

30分後……

子供の時の服は俺が今は使っていない押入れから出てきた。男物の服だが、まあ、今日くらいは我慢してくれるだろう。

服を持ってベッドに戻ると、

「くー……くー……」可愛く寝ている奴がいた。

「……まあ、いいか。俺も眠いし」服をサイドテーブルに適当に置き、猫の横に寝た。

「おやすみ」猫の頬を少し撫でて俺は寝た。

#1「落ちてるものを拾っては・・・にも、例外はある」(後書き)

猫耳って、和みますよね・・・

#2「やっぱり泣って凄い武器だと思う」

#3「男が女の子の服を見ても仕方

#2「やっぱり、泣って凄い武器だと思う」

翌日、頬にくすぐったさを感じて目を覚ますと

「にゃー」昨日の猫が俺の頬をなめていた。どうやら、起こしてく
れていたらしい。

「・・・おはよう」昨日サイドテーブルに置いた服を猫に着せてみ
る。

「にゃ？」猫は不思議そうに自分の姿を見ているが、傍目は猫耳の
生えたかわいらしい女の子だ。

「その耳は・・・帽子で隠すか」近くにあった麦藁帽子をかぶせれ
ば、万全だ。

その後俺は風呂に入り、台所で、猫の視線を感じながら朝食を作っ
た。

猫は何を食べさせればいいか分からないから、仕方なく、牛乳とパ
ンをあげると、「にゃ」「喜んだ。

「ったく・・・無防備に可愛い奴だな」

午後になって、俺は猫を連れて交番に向かった。一応だ。

「ふむ・・・猫耳が大きな特徴ですね。分かりました、調べておき
ます」そういって、警官は奥に引っ込もうとしたので

「あの、こいつは？」猫を見ながら聞くと

「あ、こちらで預かりますね」奥からゲージを出しながら警官が言
うと

「うにゃっ、にゃー」猫は急に怯えて俺の脚にしがみついた。見る
と、俺を涙目で見上げていた。

「・・・出来ればうちで預かりたいんですけど？」猫を抱きかかえ
ながら聞くと

「あ、すいません、お願いできますか？」俺は「はい」と答え、連
絡先をメモに書き、交番を後にした。

#3「男が女の子の服を見ても仕方が無い」

交番からの帰り道、俺と猫は服を売ってる店に寄った。Tシャツとか、ズボンとかは俺の古いのがあるからどうにかなるが、下着が無い。

猫は自動ドアに興味心身だったので、少しだけ遊ばせた。

「どれがいい？」子供用の下着売り場で猫に聞いてみると

「じゃ？」やっぱり、首を傾げたので、俺が適当に無地のものを選びレジで会計を済ませ、家路に着く。

#4 「猫はかまってもらわないと不機嫌だ」

#4 「猫は構ってもらわないと不機嫌だ」

家に帰ったあと、俺は仕事をすることにした。俺の仕事は翻訳だ。家の書斎に行き、PCを起動すると、前回やったところが表示された。

「別に×切が近いわけでもないが……」呟きながら眼鏡を仕事用に変える。昔から使ってるのは古くてたまに落ちてくる。

「修理にかかる費用を考えると買ったほうが安い」店員の台詞だ。

俺は言われたとおりに、新しい眼鏡を買い、普段から使っていると、またねじが緩んだりしだすだろうから、仕事時と普段時で、分けて使っている。

そんなことを頭の端で考えながら10ページほど進めると

「うーにゃー」ドアを爪でカリカリとする音が聞こえた。

「ん？」ドアを開けると

「にゃー」猫が俺の腰に飛びついてきた、不意を突かれた行動に对処が送れ、俺はしりもちを着いた。

「にゃっにゃっにゃっ」書斎にこもったので、俺が居なくなつたのと勘違いをし寂しい思いをしたようだ。涙目で俺の頬を舐めながらしがみついてくる。

「わわっ……すまない」素直に謝り、頭を撫でると

「にゃ」少し怒つたような視線が俺に向いた。しかも涙目のまま。

「すまない、今度からちゃんとドアを開けておくよ」俺はなぜか猫の額にキスをした。後になって思うと、何故したのかは分からない。

「……にゃっ」俺が額から口を離すと、猫が俺の首に手を回して口にキスを返してきた。

「んっ!？」この猫の行動には不意を突かれっぱなしだ。顔が赤くなるのを感じつつ、猫の顔を見ると、猫は目をつぶっていた。

だが、猫も顔を赤くしていたのが、なぜかものすごく可愛く感じ、

俺は猫を抱きしめた。

刹那の間、こうしていると

「うにゃ〜」猫が少し苦しそうに呻いた。

「あ、すまない、大丈夫か？」俺は抱きしめていた腕を解き、猫の顔を撫でる。

「うにゃん」猫はくすぐったそうに笑った。

その日以来俺は仕事をする時や、寝るときは、部屋のドアを開けっ放しにした。

といっても、仕事の際は俺のひざの上で画面を興味心身に見つめ、寝るときは声をかけると一緒の布団に入ってきた。

#5 「猫は可愛がるもの。怯えさせるものではない」

#5 「猫は可愛がるもの。怯えさせるものではない」

そんな生活が始まって、3ヶ月ほどした頃だ。

猫にスカートと白いシャツを着せ、上から薄い茶色のセーターをかぶせて散歩をしていた時だ。

~~~~~

ジーンズのポケットから携帯の着信メロディーが鳴る。

「はい？」携帯を耳に当てて、猫に指を口元に立て静かにするよう指示すると

「あ、駐在所の田中ですが・・・」前に猫について操作をお願いしたお巡りさんだ。

「はい、何か？」

「猫っぽい少女についてなんですけど」

「あ、何か分かりましたか？」

「ええ、飼い主だと名乗る人が出てきました。これから会えますか？」

「あ、はい、交番で良いですよね？」

「ええ、お待ちしています」

「ふう、前のご主人様が見つかったって」携帯をジーンズにしまいながら猫に話しかける。

「にゃ？」猫が首をかしげる。

「行くぞ」交番に向かって歩き出すと

「にゃー」追いかけてきた。

交番に着くと

「あ、どうもです」駐在さんと

「あ、あなたですか」見知らぬ40くらいのおじさんがいた。

「こんにちは」俺が挨拶して頭をすこしだけ下げ、猫を横目で見ると

「にやう」すこし怯えた様子で俺のジーンズのすそを掴んでいた。  
（あまり嬉しそうじゃない？・・・むしろ嫌がってる？）俺は不審に思い

「前の飼い主さんですか？」と、おじさんに聞くと

「ええ、散歩中にうっかり逃がしてしまっただけ」

「猫、飼い主さんか？」猫のほうを向いて聞いてみると

「にやう」下を向いて小さく一鳴き。

「失礼ですが、こいつを怯えさせたりするような真似、してませんよね？」すこし、語彙を強める。

「え？ええ、大切にしてみましたよ？」おじさんはすこし怯えだした。

「そうですか。猫？」振り返って聞く

「にや？」呼ばれたことで、俺を見上げる

「どっちがいい？」俺とおじさん交互に指差す

「ちよつと！私ですよ！」おじさんが声を荒げる

「静かにしてください！怯えてるでしょう！虐待の可能性があるから聞いてるんですよ！」俺は思っていたことを隠さずに告げる。

「そんなわけ無いでしょう！ほら、こっちに来い！」おじさんが猫に向かって手を伸ばす

「にやっ」途端に猫が両目をつぶり、俺の手をにぎり身を縮める。

「すこし、お話を聞きましょうか？」全部を見ていたお巡りさんがおじさんの手を握る

「ふざけるな！そいつは俺のだ！」

「それが、貴方の本音ですか」俺は声を強める、猫に悲しい思いをさせた野郎だ、今すぐ殴りたい。

「うるさい！間男が！」頭の後ろのほうで何か布製のものが切れる音がした。

「歯、食いしばってる」俺の台詞だ。

「落ち着いて！」お巡りさんの声が聞こえたが、俺の心臓の鐘の音のほうが大きい

次の瞬間、おじさんは頬を自分の手で押さえて、しりもちをついて

いた。

俺は拳に残る感覚で、目の前の男を殴ったことを理解した。

そのあと、俺はおじさんが動物虐待の罪で起訴されたこともあり、  
嚴重注意で事なきを得た。

その帰り道だ。

俺は猫の前で暴力を振って事もあって、後ろにいるであろう猫を見ることが出来ないでいた。きっと怯えているだろう。

俺たちはそのまま家に着いた。

何も言わずに俺は寝巻きにも着替えずにベッドに倒れこむ。意識は  
そこで途切れた。

## # 6 「寂しがり屋な二人」

# 6 「寂しがり屋な二人」

翌日、目を覚ますと目の前に猫の寝顔があつた。

昨日のことを思い出し、俺は猫を起こさず着替えを持って風呂に行く。

風呂から上がっても、猫は静かな寝息を立てていた。

俺はベッドに腰掛けて

「昨日は、お前の前で暴力を振るって悪かった」

そう呟くと

「うにゃ」

猫が目を開けた、どうやら狸寝入りだったらしい。

「お前……ッ」いきなり右腕を噛まれた。といつても、猫には牙が無いため、人間に噛まれてると変わらない。

「フーツ」どうやら、昨日のことについては、まだ許してくれないらしい。

「……そうか」何故こんなに悲しいのか分からないまま、俺はシャツを着て、ジャケットを抱えたまま外に出た。

なんとなく、外の空気を吸いたかった。猫と一緒にいるのが怖かった。これ以上、猫に嫌われてると自覚したくなかった。

「我ながら、弱いな」呟き、自販機で買った珈琲片手に、タバコをふかす。半年前に禁煙したせいもあり、うまい。

そうやってしていると

「ケホケホ……うー」後ろから、むせるような声が聞こえた。ききえぼえのある声だから、振り返ると

「にゃうー」煙で涙目になった猫が俺を睨んでいた。

「？」俺には、何故にらまれるのかわからなかった。

「にゃっ」猫が俺に家の鍵を突きつける。

「……?」わけも分からず、受け取ると

「にゃー」俺の腕を掴んで引つ張る猫。立ち上がり、引かれるままに歩くと

「俺の家か」そのまま、玄関に入り、さらに引かれ

「寝室が、どうかしたのか？」猫は、ベッドの端でようやく立ち止まった。

「うにゃー」いきなり、猫にどつかれて、ベッドに倒れる俺。

「な、何だよ？」押された腰を抑える俺に

「にゃ」抱きつく猫。これは・・・つまりあれか？

「朝方は怒ってたが、俺が居なくなつて、寂しくなつたのか？」猫の頭を撫でながら聞く

「・・・にゃう」うつむく猫。

嫌われているのを自覚したくなくて家を出た俺と、一人が寂しくて俺を追いかけた猫。

俺は、猫を抱きしめた。

猫の体温が恋しく、存在を欲して。

猫も抱き返してきた。

俺と同じキモチかもしれない。

数分すると

「ふにゃうー」猫が俺の耳元で鳴いた。

「どうした？」俺も同じように耳元で聞くと

「ふにゃあー」

「・・・寝てるのか・・・」多分、安心したせいだろう。

俺は猫を布団に寝かせ、毛布をかけながら少し、嬉しくなつた。

「いて欲しいと思う存在なんて、初めてだ」生まれて、俺が成人したら直ぐに出て行った親達。

最初は寂しい時も会つたが、直ぐになれた。いや、諦めたのかもしれない。

翻訳の仕事を始めて、何年か分からないぐらいの間、この家で暮らしていた。

そんな中に現れたこの猫。

拾って、一緒に生活する間に俺は、こいつのことを好きになった。

親がいなくなつて開いた穴を、こいつは埋めてくれたし、逆に溢れていた。

結果が今日のことだ。

「ずっと、一緒にいてくれ」寝息を立てている猫の頬を撫でたときに、

「莫迦だな」自分が涙を流していることに気づいた。

## #7「変わらぬ日々、変わって欲しくない日々」

#7「変わらぬ日々・・・変わって欲しくない日々」

朝

俺は意外と早起きだ。

起きてサイドテーブルの時計を見ると長針は上を向き、短針は下を向く。大体6時だ。

猫はまだ寝てる。俺は起こさぬようにベッドから出て、風呂に入り、朝食を作る。

「うにゃ〜」皿を並べていると、後ろから抱きつかれる。猫が起きてきた。

「おはよう」振り返ると

「にゃっ」「Tシャツと下着だけの猫耳少女。

「っ頼むから、ちゃんと服を着てくれ」猫を連れて行き、服を着せる。

「うにゃん」多少嫌がるが、「服を着たほうが、可愛いぞ?」といえば、

「にゃ」「機嫌を直す。

「いただきます」

「にゃーにゃ」

二人で食べる朝食。俺は口には出さないが、こうして、人と食べる事が出来るのが嬉しい。

前にそういうことを猫の前で話すと

「にゃう?」抱きついてきて、頬にキスをされた。どうやら猫にとってキスは励まらしい。

朝食の片づけをし、俺と猫は書斎に移る。

俺はPCで翻訳の仕事。

猫は俺のひざの上でPCを眺めたり、寝たりとまあ、勝手にしてる。

昼

うちには少し大きな時計がある。

これは俺がこの家に生まれた時に買ったものらしく、なかなか年季が入っているが、現役だ。

それが

「ぼーん、ぼーん」と大きな音を立てれば、お昼の合図だ。

「にゃうにゃう」猫が俺の服を引っ張る。

「はいはい」キーボードを打つ指を止め、俺たちは台所に戻り、昼食を取る。

朝と変わらぬ光景だ。

お昼を食べた後は二人でテレビを見て、3時に時計がなれば、散歩に出る。

運動をしないと人は太るからだ。それに、閉じこもってるのは猫にはストレスになるらしい。

ついでに買い物をし、家に帰り、5時まで仕事を再開する。

夕

仕事が終われば俺たちは適当に過ごす。

もっとも、仕事の締め切りが近い時にこの時間が無くなる時はあるが。

猫とテレビを見たり、一緒に何かを作ったり・・・

7時ぐらいになれば、夕食だ。

大抵、家で作る。たいていと言うのは、何かあった日。例えば仕事の区切りがあった日や、給料日など。

そういう日はどこかファミレスにいったり、好きなものを食べたり。夕食が終わればまたテレビを少し見て、俺が「猫」と呼ぶと、

「にゃ」と猫が答えお互い風呂に入る。

猫は俺が見てないと大抵体や頭を洗うのをサボる。だから俺が

「ちゃんと覚えような」といいながら猫を洗う。

風呂から上がり、パジャマを着せる時には猫は大抵あくびをしている。

湯冷めをする前に、俺たちは布団に入り、夢に入った。  
俺はこの生活を何年も繰り返した。それが望みだった。

## # 8 「猫の誕生日には、猫が来る」

# 8 「猫の誕生日には、猫が来る」  
そんな生活が始まって2年がたった。

俺は24になり、猫は5歳だ。

拾った時より、背は伸びて1m20cmくらい。髪は本人の希望により、伸ばしたおかげで肩より長くなった。

昨日、俺は猫が来てから恒例となっている、猫の誕生日を催した。猫の誕生日は前の飼い主から聞いた。正確には、お巡りさんが調べてくれた書類を俺が受け取り、猫について知った。

昨日のことで驚いたのは、猫が玄関を指差して「にゃー」と求めるので、ために空けたら

「にゃー」「うにゃー」「うにゃー」

5匹ぐらいの猫がいたことだ。どうやらこの地域の猫らしく

「にゃー」となきながら猫が抱きしめたところを見ると友達のようにだ。

「・・・ははっ、いらっしやい」俺が笑いながら玄関を大きく開けて、手招きする。

「にゃーにゃ」猫たちがなきながら、家に入ってきた。

もとより、今日料理は味付けを薄くしている。猫は薄味が好きなのだ。

猫たちはうちの猫となにやら話しているようだ。俺には「にゃー」としか、聞こえないが。

猫や、俺らによって料理は減って行き、最後に、俺と猫が頑張っで作ったケーキを俺が出す。

友達の猫たちはケーキを食べ終わるとひとしきり猫と遊び、「にゃー」と、なきながら帰っていった。

その日、俺は猫にプレゼントを用意していた。

「猫」俺がケーキに乗って最後の苺をほおばる猫を呼ぶ

「うにゃん？」尻尾（これもなかなか長く成長した）を降りながら振り返る。

その顔にはクリームがついていたが、まあ、ほおって置く。

「プレゼントがあるから、向こうを向いてる」俺がニヤニヤしながら猫の後ろを指差す。

「にゃー？」首をかしげながらも、後ろを向く猫。

「動くなよ？」そういつて、プレゼントを猫につけてやる。

「うにゃん？」違和感を感じたが、俺に動くなといわれて、固まる猫。「よし」俺が仕上げに猫の頬のクリームを指ですくって言った。

「5歳の誕生日おめでとう」鏡を猫に向けながら指ですくったクリームを舐める。薄くも広がる甘さ、旨い。

「にゃー」鏡に映るのは、猫耳を生やした少女で、肩にかかるはずの髪は後ろでポニーになっており、根元には鮮やかな赤いリボン。

「気に入ったか？」炭酸飲料の入ったコップに口をつけながら聞くとうにゃー「椅子から飛んで俺に抱きつく猫。受身が取れず、俺は猫を抱えながら、右手のコップごと床に落ちた。

昔から猫は嬉しい時は抱きついてきた。だから、床に広がった炭酸も、許そう。猫が嬉しいなら、いいさ。

「気に入ったなら、良かった」そういつた途端に、俺の唇は猫の唇で塞がれる。これも昔からの猫の感情表現だ。

結局、昨日猫がリボンを外したのはお風呂に入るときだけだった。

風呂から上がると猫はリボンを片手に俺に頭を擦りつけ、早くつけろといっているようだった。

リボンを着けてやると嬉しそうに微笑み、ベッドに倒れ、10分もしないうちに可愛い寝息を立てた。

俺は猫に布団をかけ、暫く寝顔を見てたが

俺は部屋を片し、猫の横で寝た。

## #9 「猫は嫌いですか？」

### #9 「最終話」

朝の6時、昨日、寝るのが遅かったにもかかわらず、いつもどおりの時間に起きた。

横を見ればやはりまだ猫は寝ていた。可愛い寝顔なので見ていると少し唸ったかと思うと、目を開けた。

「おはよう」「そういつて、俺は猫の頬を撫でる。

「おはよう」「ん？」

「……………今のはお前か？」俺は部屋を見回してから、猫に聞く。

「……………あれ？私の言ってること分かるの？」猫も驚いているようだ。

「5歳になったら、人語での会話が出る……………とか？」とでも、言わない限り、状況が分からん。

「やったー」「猫が飛びついてくる。俺ごと後ろに倒れるが、ベッドなので衝撃は無い。

「まあ、いいか」俺は深く考えるのを止めた。どうせわからん。

「会話が出る！言いたいことが言えるー」「ギューって、効果音がいそうなほどに強く抱きしめられた。

「丁度いい、猫って呼んでたが、名前は欲しくないか？」俺は思いついたことを言ってみた。

「あ……………欲しい！」

「お前が好きなのにしな」頭を撫でてやる。

「うーん、じゃあ、美毛<sup>ミモ</sup>？」首をかしげながら言う猫（美毛）

「ふむ、字は美しい毛色か……………いいかもな」俺は笑いながら美毛の頭を撫でる。

「にやうにやうー」人語を話すようになって、大して変わらないらしく、俺に頭を押し付けてくる。

「さて、朝飯にするか？」体を伸ばしながら聞く。  
「うん、トーストと牛乳」美毛が両手を伸ばしてはしゃぐ。人語を使えて、俺と会話できるのが嬉しいのだろうか。  
俺たちはいつもどおり着替えてから台所へ行き、朝食を食べた。  
「会話しながらの朝食は何年ぶりかな？」独り言だ。勿論、美毛に話しかけることはあったが回答がハッキリしていなかった。  
その日は俺たちはケーキを買って祝った。

寝るために二人して布団に入り、電気を消した後の会話だ。

「起きてる？」美毛が俺のほうに顔を向けながら呼ぶ、暗闇だ。

「ん？寒いのか？」美毛のほうに布団を寄せる俺。

「あのね？」衣擦れの音。

「どうし・・・」俺の声は途中で切れる。口が塞がれたのだ。感触は暖かく、柔らかい。よく知る感触だ。

「・・・秋月、大好き」口の感触が離れた後に耳が俺の名前とその言葉を聴き、また衣擦れの音。

最初のは美毛が近づいた音。最後のは美毛が離れた音。

間の感触は美毛の唇。

感触の後の言葉は美毛のキモチ。

横を見れば美毛の背中、暗闇だけど、耳が赤くなってるように見える。

俺は何も言わず、何も言えずに美毛を後ろから抱きしめて、

「俺も、美毛が大好き」

そのまま、俺たちは夢に入った。

後日談だが、

俺たちは今も二人で暮らしている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0260e/>

---

猫は嫌いですか？

2010年10月11日12時27分発行